

ハンガリーでは、今秋、労働関連法案の抜本的な改定が議論される。すでに経済省で草案が準備され、経営者団体や労働組合との事前協議が始まっている。まだ詳細が公表されていないので全体的な枠組みを議論することはできないが、新聞記事から読み取るかぎり、この改定をめぐるかなり激しい攻防が展開されそうだ。

地に落ちた労働倫理

カーダール時代を通して、勤労者の労働倫理はどうしようもないレベルに落ち込んでしまった。経済的発展に裏付けられない社会保障制度の導入は、怠業を促進する制度に転化した。政府も経済的な発展を達成できず、成果を分け合うことができないので、労働規定を限りなく緩めることで労働者の不満をそらしてきたのである。その結果、実質を伴わない、西欧先進国並みの労働者保護制度だけが出来上がってしまい、それが労働者の既得権になった。その結果として生じたのが、労働倫理の限りない低下である。

このコラムで何度も指摘しているように、ハンガリーの勤労者は就業経験や勤務経験とは関係なく、自然年齢に応じて有給休暇日数が保証されている。日本の新卒は年間10日の有給休暇から始まるが、ハンガリーでは20日から始まり、その後1.5才ほど歳をとるごとに1日ずつ有給休暇が増え、45歳で30日になるまで増え続ける。その間、失業状態にあらうと、長期の病欠状態にあらうと、それとは無関係に有給休暇は人権として自然年齢に応じて保証される。この休暇制度は社会的権利として肯定されるかもしれないが、その場合には、民間企業の負担ではなく、国家の社会保障の枠組みから有給休暇の手当が保証されるべきものである。

有給休暇に加えて、病欠による会社負担の休暇が15日保証されている。ハンガリー人は病欠をとることにまったく何のためらいもない。少し風邪をひいてもすぐに病欠をとる。病欠も有給休暇の一部という認識なのである。だから、45歳になれば、最大45日(30日+15日)の有給休暇があるというのが、ハンガリーの勤労者の意識である。これほどの休暇が保証されているから、会社では毎日、必ず誰かが休暇をとっている。製造業の休暇取得率は最低でも従業員の2割を下回らない。100人雇っていると、常に少なくとも20人がいないのである。勤務倫理が低いところでは、さらに長期の病欠などが加わり、3割近い従業員が常に不在という状態になる。アジアの諸国では考えられないことが、ハンガリーでは日常茶飯の現象になっている。

極端に言えば、日本人は労働の合間に休暇をとるが、ハンガリー人は休暇の合間に仕事するという感覚なのだ。労働倫理でみると、これほどの違いがある。こういう感覚だから、担当者が急に休暇でいなくなり、手続きや具体的な話を進めようとしても、担当者がいないことが頻発する。休暇をとる時に、同僚に懸案事項を預けるという習慣がないから困る。

仕事より休暇の優先順位が高いから、仕事を放置して休暇に入ることに、何のためらいもない。それが権利だと誤って認識されている。

これでは市場経済の経験が浅いハンガリーが国際競争に太刀打ちすることは不可能だ。経済的に遅れた国や地域の人々が、先進国の人々と同じように休んでいたのでは、初めから競争に負けている。スポーツでは他の選手の何倍もの苦しいトレーニングをこなして初めて、高いレベルに到達できる。レベルの低い選手が、レベルの高い選手と同じ程度のトレーニング、あるいはそれより少ないトレーニングに甘んじていれば、永久にトップレベルに到達することはできない。これは小学生にも分かる自明の理だ。

ところが、自分の仕事のことになると、こういう自明の理も理解不能になる。西欧先進諸国の勤労者と同じように休むことが既得権なのだ。ハンガリーが経済停滞から脱却するための前提条件が、「労働によって生活の糧を得る」という至極当然の真理を、労働法においても実現することなのである。この点で政府が打ち出した基本理念は間違っていない。

休暇が休暇を生む

今秋の改定で大きな争点になりそうなのは、病欠や出産期間中の有給休暇の取り扱いである。

現在の規定によれば、病欠休暇中も出産休暇中も勤務期間とみなされるので、年間の有給休暇がフルに取得できる権利が保全される。週末に友人とサッカーで遊んでアキレス腱を切り 3 カ月会社を休んでも、有給休暇が四分の一 (3/12) 分を減らされることはない。だから、出産休暇明けで会社に戻った女子勤務者は年間の有給休暇を消化するために、すぐに長期の有給休暇に入る。その分だけ、出産休暇が増えたと同じことになる。

このように現在の休暇制度は雇い主に大きな負担を強い、他方で勤労者の労働倫理を著しく損なうものになっている。この制度の不合理性について、昨年夏、ハンガリー日本商工会は政府提言書の中で、この不合理の解消を求めた。怠業を促進するような休暇制度はハンガリーの経済発展に貢献しないからである。「休暇期間中に休暇の権利が付く」という制度は不合理極まりない。

今、政府は労働にもとづく社会の構築を目指している。政府から補助を受けるのではなく、自らの労働によって生活の糧を得るという基本的な姿勢の上に、初めてまともな社会を作り上げることができる。この考え方は間違っていない。社会党を初めとする野党は労働者の既得権のはく奪として、社会闘争に持ち込むだろうが、ハンガリー人は今一度、体制転換の初心に帰って、労働倫理の再確立を目指すべきだ。

何が欠けているのか

日本の航空会社の機内サービスはやや過剰だが、MALEV ハンガリー航空に乗り換えると、途端にその格差が目立つ。それはたんにサービス内容が悪いというのではなく、勤務にたいする姿勢そのものの違いなのだ。

とにかくハンガリーのスチュワーデスたちは個人的な会話が多い。これはハンガリーの職場一般に見られることだが、客がいないところでは途端に個人的な会話に没頭する。しかも、話に熱中するものだから、肝心のサービスを忘れてしまう。だから、客が来てもすぐに対応できない。

ビジネスクラスに乗ると、上着を預かってくれる。到着が近づくと、預かった上着を一つずつ返してくれる。ところが、お客が少なく、話に熱中してしまうと、そういう小さなサービスは忘れてしまう。着陸後、自分で上着を取ろうと、キャビンのドアを開けようとしたら、慌てて「忘れていました。御免なさい」とようやく気付くのである。こういうことは、まず日本の航空会社では考えられない。「忘れていました」というのは、ここだけのことではない。多くの仕事場で、「忘れていました」という言い訳が幅を利かせている。そうやって謝れば、済んでしまうからである。

もっと信じられない光景も目にした。たいしたことではないのだが、MALEV のビジネスクラスの一つの売り物の一つが、Häagen-Dazs のアイスクリームのサービス。日本からの帰途、食欲もないから出されたものも満足に食べないでトレイを返した。そういえば、アイスクリームはなかったなと思っていたら、カーテンの裏でスチュワーデスが食べている。これには呆れてしまった。ふつうの航空会社では考えられないことが、旧社会主義国の航空会社ではふつうに行われるというのは、やはり旧体制時代の労働倫理の低下の負の遺産である。

もう一つ MALEV の事例で言えば、昨年夏のマラガ行きの便が 4 時間も遅れた時のことだ。最初は 1 時間遅れだったのが、次々に遅れて行くものだから、インフォメーションカウンターに聞きに行った。ところが、その返事は、「出発のカウンターで聞いてくれ」だ。これだけ遅れれば、出発カウンターには人はいない。何のためにインフォメーションカウンターがあるのか、担当者はまったく分かっていないし、会社の情報システムがそのように構築されていない。これは担当者の問題というより、経営管理の問題である。

MALEV のような大きな会社の労働規律を保持するのはたいへんなことは分かるが、それにしても基本的な訓練ができていない。実際、体制転換以後も MALEV の経営者ポストは政治的指名だったし、ここ 10 年は何度も所有者が変わり、そのたびに経営者も変わったから、とても従業員教育など行っている暇も、そういうアイデアもなかっただろう。そして、乗務員たちは自分たちがやりたいようにやるという習慣が身に付いてしまった。こういう府抜けた公共企業は今でもかなり存在するし、民間企業にもこのような社会的慣習の影響が及んでいることは日ごろの経験から体験済みである。

いったいこうして現象はなんと形容したらよいのだろうか。職業意識の欠如、プロ意識の欠如であることは間違いない。そう考えると、ハンガリー社会全体がプロ意識に欠ける問題をはらんでいることが見えてくる。そう、「プロフェッショナリズムの欠如」、これは 40 年近くにわたった社会主義制度の負の遺産なのである。

お役所はもっとひどい

曲がりなりにも民間資本が入っている会社がこうなのだから、完全な公共企業体やお役所の仕事ぶりは、信じられないほどひどい。

筆者の自宅のベランダに屋根を付け、周りを開閉可能なガラスで覆う建築許可をとるのに10カ月かかった。ブダペスト2区区役所の建築課が4カ月かけて却下したので、ペスト県の上級機関に上訴し、それが認められて再び区役所の建築課に差し戻されたが、書類が野ざらしにされて、差し戻しから法定審査期限も切れた3カ月（法定審査期間は60日と決められている）を経て、弁護士を立てて建築家に問い合わせたら、「忘れていました。すぐに処理します」という返事。さらに、建設が済み、「使用許可願い」をこの2月に出したが、7月になっても返事がない。再び弁護士が問い合わせたら、「仕事がたくさんあって忘れていました」という返事。

こうやって、最初の建築申請から2年近く経ってしまった。この間、作成した書類は合計で100頁ほどになる。お役所も、書類受け付けるたびに、既定の書式をプリントした長文の書類を送りつけてくる。その頁数も50頁ほどになる。15平方メートル程度のベランダをガラスの雨戸で囲うだけのことに、これほどの無駄な時間が使われている。そうやっている当人たちは自分たちのやっている仕事の非効率さにまったく気づいていない。小さな案件はとりあえず受付書類だけを作成して、戸棚にしまってしまう。あまりに小さな案件だから、回答期限が過ぎるのも忘れてしまう。彼はいったい誰のために何のために仕事をしているのだろうか。そういうことを考えることすら止めてしまった存在なのである。

こういう労働倫理や職業意識のレベルを引き上げるのは容易なことではない。しかし、それなしにはハンガリー社会が発展しないことも事実なのである。

（関連する分析は、<http://morita.tateyama.hu> を参照されたい）